

国木田独歩の文章技法

伊藤 淑人

キーワード

文章 自然 技法 絵画 芸術

要約

国木田独歩の文章は、今もなお名文と言われているが、その芸術的文章が確立していく過程を検証した。それは、少年時代に自然に恵まれた環境で育ったこと。またワーズワースの詩、ツルゲーネフの小説に出逢ったこと。そして、星や空など天体に対する興味、雲の観察と研究などが挙げられる。さらに独歩は、少年時代から絵が好きで、描くことも得意であった。このような、個人の体験と文章修業から、随筆「武蔵野」、小説「忘れえぬ人々」等の感覚的な文章による自然描写が確立したと考えられる。その文章の生成過程の軌跡を辿り考察する。

国木田独歩の小説の評価は、発表当時から頗る高く、それは特に、女人筋の読み手に言えることでもあった。例えば、夏目漱石は「独歩

氏の作に低徊趣味あり」で、独歩の『運命論者』は面白いと思つて読んだ。實際面白い」と言っている。また「今余の記憶に残つて明らかなるは、『巡查』だけである。『巡查』なる一人の人間を描き出したもので、其巡查が好く出て居る」とも述べている。次に、芥川龍之介は「文藝的な、あまりに文藝的な」の中で「国木田独歩は才人だった」〈柔い心臓を持つてゐた独歩は勿論おのづから詩人だった〉と言う。そして、独歩の作品中「最も完成したものを挙げるとすれば、『正直者』や『竹の木戸』にとどまる」であろうが、僕は「最も調和のとれた独歩を——或は最も幸福だった独歩を『鹿狩り』等の小品に見出してゐる」と述べている。日本を代表する小説家二人による評であるが、国木田独歩の小説を賛美する同時代作家は多くいる。

周知のように、独歩の作家としての出発は詩であり、詩集『抒情詩』所収の「山林に自由存す」は、余りにも有名である。この詩は、独歩の出發を飾った原点となる作品であるが、近代明治の自由民権運動によって鼓吹された「自由」を、自然の中にこそ存すると高らかに、歌い上げているものである。この詩に顕著に見られるように独歩は、「自然」と「自由」をテーマに掲げ文学の世界に打って出た。そして、日記『欺かざるの記』の前半には、この自然、人間、人生を論究した文章が散見する。その日記、明治二十六年九月十日には「人間、自然、人生を寂漠に瞑想」する、人間や人生を思えば「自然を思ふ」、自然に対して「同情あらしめよ」と書いている。次ぐ日には、宗教、詩歌、哲学も「吾」の疑問より生ぜしなり、故に「真理、美、愛、希望、

悉く「吾」を重んじ「吾」を求めたる結果の思想である。さらに「自然の美、神の愛を感じ得るは「吾」を見出し得たる結果のみ」と記している。初期の独歩は、人間、自然、人生、及び宗教、詩歌、哲学、及び真理、美、愛、希望、吾、などに激しい思索を巡らせていることがわかる。また翌日の十二日には、自然について考究し「ウオーズオースの詩を唱す」、再度「自然を思ふて人生を思ひ、人生を思ふて自然を思ひ、而して人間を思ふ」と言う。そして、ワーズワースに於いては「自然の意と人生の義」を分離するべきではなく、悉くは「神の黙示たり人生の秘奥」であり、自分は「自然。人生。神。悉く吾に在りて融化する所を得たると信す」と述べている。ここで独歩は、自然、人生、宗教を、吾によって融化させるという思考を見せており、ワーズワースからの示唆と言っている。さらに、この二ヶ月後にも同じく、冥想すれば「人類は直ちに此大自然の中に見出す」「自然と人間とを関係なく想ふ能はず。人情を忘るゝ能はず」と繰り返されている。この思想は、翌年の四月十六日にも「人間の外に此の大自然で夫制力あり。法則あり。而して茲のうちに人間てふ吾あり。人類てふ吾あり」と記されている。そして、人間、人類、吾とは、「情」であり、これは、文学も、宗教も、美術も「情と情との交通」であるという独歩の宗教論、芸術論に至り着くことになる。

先に、これらの思想は、ワーズワースの詩の影響であると書いたが、そのワーズワースについては、「ウオーズワースの自然に対する詩想」で詳しく論じている。その論文で、ワーズワースは自然の詩人と言わ

れるが、しかし、彼が「自然を愛するは我国の歌人が花鳥風月に浮かるゝ心と同一視すべからざる」もので、それは実に「自然の美を信する」思想である。その自然観は、宗教家のように「神の御手の力を現はす者」と見做し、自然を賛美することを以て神を賛美するの手段なりとは為さざりし」もので、すなわち「自然の美は何処までも自然の美として直ちに其力を信じたる」ものである。ここにワーズワースが「詩人にして宗教家にあらざる所以」があり、それ故に、彼の「自然観を以て直ちに彼の宗教と見做すのは不可」と述べている。また同じく、ワーズワースの自然についての詩想は「冷やかなる哲理より構成せられたる者」でなく、彼を「哲学的詩人なりと称すと雖も彼は決して哲学者」ではない。なぜならばワーズワースは、最初より「智を以て自然に入らず、情に由て感得し、然る後ち之れを思ひ之れを信じ、然る後ち之れを益々愛したる」からと論じている。独歩がワーズワースは、自然の美を追求した詩人であり、宗教家でも哲学者でもなく、自然詩人であると主張することに異論はない。だが独歩の内には、日本の環境、日本、東洋の思想、宗教が潜在していることは推測できる。

そのことは、独歩自身の自然体験である自伝的小説「少年の悲哀」で、まずは明らかになる。回想風にかかれたこの小説の中で、独歩は、少年時代を田舎で過ごさせてくれたことを「父母の好意を感謝せざるを得ない」と言う。もし僕が、東京に出ていたならば、「智慧は今よりも進んでいた」が、「心はウオーズワース一巻より高遠にして清新なる詩想を受用し得ることが出来なかつた」と語っている。それは「野

山を駆け暮らして、我幸福なる七年」であり、近郊は「樹林多く、川あり泉あり池あり、そして程遠からぬ所に瀬戸内々海の入江」で、自然に「不自由を為なかつた」から、と述べている。また「欺かざるの記」の明治二十八年一月十五日には「弟及び一少年と共に數量を遠行して釣を垂れし事あり。小川の清冽なる水の流今猶ほ眼前に在り」というように数々の思い出が綴られている。そして「岩国の時代を回顧すれば恍として更らに夢の心地す」と記されている。ここで独歩は、少年時代を田舎で過ごしたことが、ワーズワースの詩を受け入れる素地となっていることを宣言するとともに、その環境に感謝している。自然に恵まれた岩国での少年時代とワーズワースの詩から、独歩の自然観、思想が生まれたことが良くわかる。そして、あの詩「山林に自由存す」や、優れた自然描写に支えられた随筆「武蔵野」、及び数々の名短編小説が執筆された。

その「武蔵野」の中には、二葉亭四迷が訳したツルゲーネフの「あひゞき」の一節が、二箇所も長く引用されている。冒頭には「自分がかゝる落葉林の趣きを解するに至つたのは此微妙な紋景の筆の力が多し」とある。「武蔵野」については後述するが、直接の文章創作上に於いては、この二葉亭四迷訳のツルゲーネフの影響も指摘できる。また、本論考とは趣旨が異なるので、論じることは避けることにするが、広く言われているように、独歩の筆そのものが鍛えられたのは、従軍記者体験であろう。明治三十七年十月から五ヶ月の間、千代田艦に乗船し、『国民新聞』に「愛弟通信」という記事を送稿して好評を得た。

兎に角、種々多様な要素が複雑に絡み合って、独歩の文章が出来上がったことは確かなことである。

独歩の初期の小説に「星」という興味深い作品があり、少々、解説を試みることにする。

とある田舎に若い詩人が、自宅の緑や木々に囲まれた庭を眺めて、詩を作り歌い、楽しんで暮らしていた。ある夕べ、詩人が燃やした落葉の煙を、大空にいた相愛の男星と女星が見つけ、その煙を辿って庭に降りてきた。若い詩人が眠っている寝室に入ると、そこには、国々の詩集が取り乱れてあり、女星は、開かれていた一編の詩を読んで、この若い詩人の気高さに感動した。女星は、夢の中に現れて「君は恋を望み玉ふか、はた自由を願ひ玉ふか」と問うた。若い詩人は「自由の血は恋、恋の翼は自由なれば、われ其一を欠く事を願はず」と答えた。再び、西の空に二つの星が輝いたとき、若い詩人は「甲斐なき自由にあこがる」と涙し、声を上げて詩を歌い上げた。蒼空に立つ詩人の姿は、さながら「自由の化身」とも見えた、という内容である。この埋もれた小品が、独歩の文章修業を解く意外な鍵と思われ、ここに将来の可能性を垣間見ることが出来る。まずは、詩人の自宅の庭周辺の自然描写、次に、星や夜空など天空の描写、早い時期にこれだけの確実な描写が完成していたことに驚かされる。もちろん、星の世界と人界

を背景として、メルヘンチックに恋と自由を語ったテーマもいい。独歩は、山、川、草、木という自然だけでなく、天体に対しても非常な関心を抱いており、鋭い観察眼を働かせていた。この「星」は独歩が、天空、天体に興味を寄せていたという意味で、続くユニークな論文「天気の話」に繋がる。

そこで独歩は、雲は水蒸気が凝結して成ったものだから、雲を子細に観察すれば、天気を占うことができるという発想で、雲の分析を試みている。冒頭の「其一 雲」では、雲の形、空の色によって「晴天」〈雨並に風〉〈雪空〉を予期することが可能であるという総論が展開される。続けて、この論文の先駆けとしてルーク・ホワードの研究を挙げ、そこには雲が七種類に分けられていると指摘する。その分類に従って、各七章「巻雲（シラス）」「積雲（キムラス）」「層雲（ストレーツ）」「巻積雲（シロキムラス）」「巻層雲（シロストレーツ）」「積層雲（キムロストレーツ）」「乱雲（ニンバス）」の順で述べられている。場合により晴雨計も用いているが、基本としては、雲の形や色彩、その量も現れる時間などの分析によって、天候を予測するというものである。先行する研究があり、独歩の独自性はどれ程かはわからないが、精細な雲の描写としては、大変に優れた文章となっている。

雲についての作品は、総題「詩想」という小説風の断片の中にあり、それは三百字程度の短い文章で、章題は「丘の白雲」となっている。内容は、大空に漂う白雲のもと丘に横たわった童が、そのまま寝入り

夢を楽しく見る。雲は童をのせて〈限りなき蒼空を彼方此方に漂ふ意の閑けき〉、童は、うれしく地上のことを忘れてしまう。目覚めたときは〈秋の日西に傾きて丘の紅葉火の如くかゞやき、松の梢を吹く風の調は遠き鳥根に寄せては返す波の音〉にも似ている。やがて童は、雲のことを忘れて〈憂き事しげき世の人となりつ、様々のこと彼を悩ましける〉、その〈をり〉〈憶ひ起して涙催ふす彼の白雲、かの秋の日の丘なりき〉というものである。他愛もない小説断片と思われるが、大空に浮かぶ雲との戯れや親近感、夢想と現実等を作品化したものであり、夢想癖のある独歩自身の少年時代の懐かしい回想かと受け取れる。先の「星」、「天気の話」、この「詩想」、いずれにしても独歩の自然観の中には、空、星、雲などの天空、天体が含まれていることがわかり、作品自体はメルヘンチックなものだが、内容的には、初期に盛んに思考している宇宙論と無縁ではないと思われる。

さて雲と文章と言えば、直ちに想起されるのが、島崎藤村の「千曲川のスケッチ」等であり、詩人であった藤村は、小説家に転身するため長野県小諸に移り住み、千曲川の自然と人々の暮らしを文章でスケッチしたり、雲の観察記録ノートを付けるという習慣を行った。この観察記録の緻密さや的確さには、ただ驚かされるばかりであるが、藤村は、このような地味な努力によって、自己の小説の文章を根気よく確立していったのである。これは推測の域を脱し得ないが、有名な藤村の雲の観察による文章修業に、前述の独歩の作品や試みは、ヒントとなっていないか、或は、影響を与えてはいないか。少なくとも、雲

の描写、研究は、独歩のほうが藤村より一步も二歩も早かった。

また先の「天気の話」には、文章に添えて各々に七種類の雲の見事な挿絵が附されている。これは、本人自身の手になるものか、挿絵画家によるものかは判然としないが、独歩は絵が好きであり、実作も得意であったことは紛れもない事実である。そのことは、後年に回想風に執筆された自伝小説「画の悲み」で良くわかる。この話は、独歩の分身で主人公である自分（岡本某）の〈子供の時、何よりも画が好きであった〉〈得意がつて居た〉という語りで始まる。だが、絵に於ける学校での第一の名誉は、同級生の〈志村という少年〉に奪われており、自分は〈今に見るといふ意気込〉で励んでいた。学校の展覧会で、自分は〈馬の頭〉の〈実物の写生を試み〉、志村に必ず勝つと〈大勝利を予期して出品〉した。当日の志村の画題は〈コロンプスの肖像〉であり、しかも〈チョーク〉で描いた作品であった。一枚の絵、馬の頭とコロンプスの肖像とは、まるで〈比べ者にならん〉程で、かつ〈鉛筆の色〉は〈チョークの色〉に及ばない。つまり〈画題といひ色彩といひ〉、自分のは要するに少年が書いた画、志村のは本物〉であった。自分は、学校の門を走り出たが〈止めやうと思ふても涙が止まらない〉、そして〈口惜いやら情けないやら〉で、川原に倒れて大声を上げて泣いた。いくらか気が晴れた頃、自分も〈チョークで書いて見やう〉と思い、チョークを買って、また写生に出た。再び先の川辺で、水車の写生をしようとして行ってみると、そこに一人の少年、志村が座っていた。そこで二人は、写生をするともに絵について語り合い、学

校でも〈全く中が善く〉なり、以来〈二人で画板を携へ野山を写生〉して歩くようになった。その後二人は進学したが、故あって志村は村落に帰り、自分は東京に遊学することになり〈二人の間に音信〉もなくなつた。東京に出てから、自分は〈画を思ひつゝも画を自ら書かなくなり、たゞ都会の大家の名作を見て、僅かに自分の画心を満足〉させていた。そして二十歳のとき、久しぶりに故郷に帰つたので、志村のことを人に聞いてみると〈彼は十七歳の歳病死〉したとのことであつた。久しぶりに画板と鉛筆をさげて、写生に出てみた故郷の風景は〈旧の通り〉であつたが、自分は〈最早以前の少年〉ではない。かつて〈志村と共に能く写生に出た野末〉に望んで〈思はず泣いた〉という話である。これは少年時代の、独歩と友人との絵画にまつわる思ひ話であるが、しみじみとした味わいのある秀作と思われる。作家独歩は、竹馬の友との写生の思ひ出と、美しい故郷の自然と、絵画を愛する心を大切にして、文学世界を生きていた。

この「画の悲み」の姉妹品に、「画」という作品があり、内容的には、前半は同じく展覧会の話で、後半は弟との写生旅行の話、そして自分と絵画についてを語つたものである。展覧会の話については、前作と同様なので触れないが、ここでは友人志村は〈予より一級高き村田と呼べる少年〉となつており、ついに〈村田のコロンプス程に至る能はざりき〉と告白されている。続けて、進学し寄宿した中学校が、家から八里余りの都会にあり、長期休みには歩いて帰省した。その道すがら、山腹、溪流、灌木の林、山谷の風、平野など、歩むにつれて

〈山野溪流次第に其趣きを變ずる〉のを眺めて進んだ。最も感動したのは〈形、色、光、影〉が、意味深い〈迷語の如く予の眼に映じ〉ることであり、自分は、ただ〈如何に画かば此迷語を解き得るか〉と思ひ、苦しみながらも〈夢みる如き愉快に耽〉って、八里の難路を歩いた、と語っている。中学時代の独歩は、帰省の道中で自然に接し、終始、絵を描くことを考えており、こんなところにも独歩と自然との親密な交流は存在した。中学時代に、歩きながら自然を観察し、自然を深く認識するに至ったという事実は、やがて、大きな芸術思想となつて成就することになる。次ぐ弟との広島への写生旅行は、感動的で、山海、岬、島々、海峡を幾枚も下絵に描いたと言っているが、ここでこの広島風景描写は、「忘れえぬ人々」を彷彿とさせるものがある。そして、筆を投ずることの出来ないものに〈筆をとらしむる者は自然なればなり否、自然を恋ふるは人間の靈なればなり〉と言つ。従つて、自分が絵を好むのは自然で〈形、色、光、影の巧みなる配合の前にはわが無邪気なる心無邪気に躍りしのみ〉と述べている。美麗な自然を見ると、直ちに絵筆を取りたくなるのは、独歩にとって絵は習慣化した肉体的な行為であり、その絵の写生によって良く自然を理解することが可能となつたのである。

絵を描く行為と文章を書く行為とは、ともに共通するところがあり、原点は素材の観察で、次に、写生、描写する被写体をより深く認識することが必要である。それは、観察や観察という言葉を使うより、むしろ考察や洞察と言う表現のほうが的確かも知れない。その描く題材

を内面化する過程に、作者の人間性や思想が重要となってくる。その意味で自覚していたかどうかはわからないが、独歩が絵画を好み、自ら写生することも得意であったという事実は注視できる。独歩の幼少年時代の強い自然体験と絵画創作、また、雲の形や色彩などから天気を予測する雲の研究は、文章作家の習練としては有益であった。先に触れたが、藤村も、千曲川周辺の人々の生活と自然を絵画写生のように言葉で描き、かつ緻密な雲の観察記録ノートを付け、自己の文章を確立した。この二人の作家が示唆していることは、絵画創作でデッサンやスケッチを厳しく指導するように、文芸創作に於いても、言葉、文章によるデッサンやスケッチは大切であるということである。真から身に付いた独歩の絵の写生は、やがて文章の写生となつて、しかも、形、色、光、影の鮮やかな配合による芸術的文章となつて結集することを予感させる。

独歩の文章を論じるとき、必ず引き合いに出される作品が、随筆「武蔵野」である。その冒頭では、武蔵野の歴史と魅力についてが語られ、続いて日記体で、天候と情景が書かれている。そして、ツルゲ―ネフ『あひゞき』を長く引用し、有名な〈楢の類だから黄葉する〉の場面が展開される。もちろん〈黄葉〉〈蒼ずんだ冬の空〉という色彩も鮮やかだが、所々に〈時雨が私語く〉〈凧が叫ぶ〉のような擬人法

を使い、武蔵野の様々な音から〈一種の沈静〉を捉える。まずは音の描写だが、多種多様に〈鳥の羽音、囀る声〉〈風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ声〉〈林の奥にすだく虫の音〉〈空車荷車の林を廻り、坂を下り、野路を横ぎる響〉〈蹄で落葉を踏く蹶散らす音〉〈村の者のだみ声〉〈だしぬけに起こる銃音〉などが繰り広げられる。実に録音マイクで収集したような描写だが、しかし、目的は音を描くことばかりではなく、次の沈静を訴えることにある。武蔵野の時雨には、〈幽寂〉で〈幽かで、又た鷹揚な趣き〉があり、それは〈優しく懐しい〉のが特色である。そして、総ての音が止んだとき〈自然の静蕭を感じ、永遠の呼吸身に迫るを覚ゆる〉、風の音は〈人の思を遠くに誘う〉とある。武蔵野の風景を感覚で捉えた描写は、音から沈静へ、沈静から幽寂へ、幽寂から思索へと移行していくが、それは、自然の描写のみに留まることなく、人間の深い思考にまで到達している。文中に、自らの日記に記した〈林の奥に座して四顧し、傾聴し、睥視し、黙想す〉を掲げ、同じく『あひゞき』中の〈自分は座して、四顧して、そして耳を傾けた〉も引用しているが、しかしこれは最早、単なる自然ではなく、「自然の声を聞く」という日本的瞑想の世界、禪定の境地に入り込んでいると言ってよい。そして音ほどではないが、光についても書かれており、林の中を歩いていると〈澄みわたつた大空が梢々の隙間からのぞかれて日の光は風に動く葉末々に碎け、その美さ言いつくされず〉とある。また、広い平原の林が〈隈なく染まつて、日の西に傾くと共に一面の火花を放つとも特異の美観ではあるまい

か〉とある。多少は通常的と思われるが、木洩れ日と夕日の美観を示し、自然散策の素晴らしさを説いている。これらの描写は、文章と云うより、まるで絵や写真のようで、その姿は自然の中に独り静かに座して、じっとカメラを構え、シャッターを切り続けている写真家のごとくである。

このように「武蔵野」の文章には、色彩、音、光が取り込まれており、全体として絵画的で、それは続く、高台や林、田畑など全景を描いた場面で、よりはっきりとする。そこで、「武蔵野」には〈禿山はない〉が、しかし〈大洋のうねりの様に高低起伏〉しており、外見には〈一面の平原の様で、寧ろ高台の処々が低く窪んで小さな浅い谷〉をなしている。谷の底は〈水田〉で、畑は〈高台〉、畑とは〈野〉のことであり、それだけでなく〈農家とその間に散在〉している。即ち、野や林やらが〈ただ乱雑〉に入り組んでいるところに、武蔵野に〈一種の特色〉を与え〈ここに自然あり、ここに生活あり〉の趣である。前出の音と光の場面が、筆者が座して見た近景とすれば、ここは高台から一望に眺めた情景で、絵画の遠近法を利用して全景を描き出し、次に、その断面を大きく写し出すかのように、水田と野原の細かな情景が描かれる。そこには、稲が熟する頃になると〈水田が黄んで、刈り取られた後は〈大根畑〉で、大根が抜かれると、野は〈麦の新芽で青々〉となり、残された〈尾花野菊が風に吹かれて居る〉と書かれている。時の流れにともなって、様々な田畑の収穫が行われ、野の色が微妙に変化していく様子を描いている。そして、林の絶え間

から〈国境に連る秩父の諸嶺が黒く横わって居て〉、恰も〈地平線上を走っては又た地平線下に没して居る〉ように見えると遠景描写に戻っている。再び、写真に例えれば、秋から冬にかけての武蔵野の原野を、カメラズームを用いて撮影でもするかのように、まず全貌を写し、次にアップで水田や畑の姿を写し出し、さらに、遠くの連山から地平線へとアングルを移していく。自然を断片的に切り取り、連続させた写真スライドのような文章、全景、近景、中景、遠景と自在に描いていく文章、基本的には遠近法を用いた絵画の手法で、美麗な武蔵野の風景を描き出している。自然を写実する文章の確かさもさることながら、絵画の構図を駆使した文章となっており、それだけ現実味が増していると言えよう。

続いては筆者が、実際に行動を起こし、武蔵野の散策に入っていくという良く知られた〈武蔵野に散歩する人は、道に迷うことを苦にしてはならない〉。その美しさは〈当てもなく歩くこと〉によって得られ、ただ道を〈ぶらぶら歩いて思いつき次第に右し左すれば〉満足する、という場面である。ここで文章が、描写から一転して語り口調となり、されば〈君若し〉というように語りかけ、読者に道案内をする、或は、散策の心得を論ずかのように書き出される。武蔵野で、道に困ったなら〈君の杖を立てて其倒れた方に往き玉え〉、また、道が二つに分かれていたら〈其小なる路を撰んで見玉え〉、その道が〈君を妙な処に導く〉とある。さらに、小鳥が鳴いていたら〈引きかえして左の路を進んで見玉え〉、たちまち〈林が尽て君の前に見わたしの広い野が開

ける〉、もし菅原の方を下りるなら〈広い景色が悉く隠れてしまつて、小さな谷の底に出る〉とある。とかく武蔵野を散歩する人が〈高い処高い処と撰びたくなる〉のは〈広い眺望を求むる〉からだだが、その望みは〈容易に達せられない〉、武蔵野に〈見下す様な眺望〉は期待できない。それよりも〈真直な道で両側十分に黄葉した林〉の道を、独り〈静かに歩む事のどんなに楽しかろう〉、例え道に迷つても〈同じ道を引きかえして帰るは愚〉であり、所詮は〈迷つた処が今の武蔵野〉に過ぎない。方角を決めて〈別な路を当てもなく歩く〉ところに妙があり、そうすると思わず〈落日の美観をうる〉ことがある、と再び夕日の風情、落日の美観を強調している。

その後も独歩の自由散策は、小金井、多摩川と引き継がれていくが、何度も自然を味わい観察しながら、当てもなく彷徨する散策の醍醐味が説かれる。所々に入る筆者の実体験に裏打ちされた現実的な自然描写が、より確実性を持たせ、共に散策をしているかのような錯覚に陥る。この場面は、断片的な写真、スライドというより、歩きつつの自然観照、つまり、ビデオカメラをまわして撮影しているような気分になるところである。幼少年時代に、野山を駆け巡って遊んでいたという思い出、中学時代に八里の道を歩いて帰省したという回想が彷彿としてくる。また、独り歩きをこよなく愛するから、ペンネームを独歩としたという逸話も納得できる。否、自然を描写する手腕だけでなく、文章構成自体が、実に細かく計算されており、「武蔵野」という作品に賭けた独歩の並々ならぬ気魄を伺い知ることが出来る。

この「武蔵野」の延長線上に浮かんでくる小説が「忘れえぬ人々」で、その舞台背景は多摩川の二子の渡しにある溝口という宿場と旅人宿亀屋で、何か物淋しく陰鬱な風景となって設定されている。小説の内容は、主人公で語り手である大津弁次郎が同宿した秋山松之介に、過去の旅で出逢った忘れることの出来ない光景を語って聞かせるというものである。その話の一つ目は、帰省するため瀬戸内の汽船に乗っていて「右舷左舷の景色を眺めていた」とき、或る小さな島に「何か頻りに拾っては籠か桶かに入れていた」人が見えた。僕は「この淋しい島かげの小さな磯を漁っているこの人を見つと眺めていた」が、そのうち「磯も山も島全体が霞の彼方に消えて了つた」という光景である。この場面もまた、ズームレンズを使い、船の甲板に佇んで見る全景から、やがて接近してくる島、遠ざかっていく島を撮影するというような、全景、近景、遠景の絵の構図である。その手法が、長閑な船旅の情緒を醸し出し雰囲気を高めている。内容は、言うまでもなく自然と人間の融合美で、純日本的な美の世界である。二つ目は、九州旅行で阿蘇山に行き、噴火口を見た夕暮れの帰り道に、朗らかな澄んだ声の馬子唄と空車らしい荷車を引く音が近づいてきた、その「俗謡の意と悲壮な声とがどんなに僕の情を動かした」ことか。年の頃「二十四、五歳と思われる屈強な若者の〈遅しげな体軀の黒い輪廓〉、僕は〈壮漢の後影をじつと見送〉って、そして〈阿蘇の噴煙を見あげた〉という思い出である。先の静かな瀬戸内海の風景から一転して、荒々しい自然と共に生きる逞しい若者の姿を描き出し、自然と人間の一体化を

現した。阿蘇山の噴火口を覗くという行為と、俗謡を歌い荷車を引く若者との、夕暮れの帰路での交差は、いわばクローズアップされた近景描写である。また、次第に近づいてくる朗らかな澄んだ歌声と、空車らしい荷車の音という聴覚を利用し、大いに迫力を盛り上げている。この小説の三つの話の中では、最も長く書かれてあり、内容、描写ともに勝れているが、このテーマは後の、北海道を舞台とした小説「空知川の岸辺」に受け継がれていく。三つ目は、四国の三津ヶ浜での朝の魚市場での雑踏の中の出来事で、そこらに「腥い臭が人々の立騒ぐ袖や裾に煽られて鼻を打つ」なかに、一人の「琵琶僧」が立っていた。その顔の色、眼の光は「悲しげな琵琶の音に相応しく、あの咽ぶような糸の音につれて謡う声が沈んで濁つて淀んで」いたが、しかし「忙しそうな巷の光景がこの琵琶僧とこの琵琶の音とに調和しない様で而も何処に深い約束がある」ように感じられたという光景である。この場面は、魚市場の鼻を打つ程の生臭いという嗅覚と、雑踏の賑わい及び歌う声と琵琶の音という聴覚から成っている。これは、いわゆる整っているという意味での調和ではなく、雑然とした生活という現実空間と、清浄無垢な世界との対照による理不尽な調和、不調和という調和の世界である。そして大津弁次郎は、人生に苦しみ「生の孤立を感じて堪え難い」とき、これら「周囲の光景」と「人々」を思い出す。そのとき「心の平穩」と「自由」を感じ、また「名利競争の俗念」が消えて「同情の念」が深くなる。つまり、これらの情景を思い浮かべることにより、孤立から抜け出し心の安定を得、自己を支えら

れるというのである。

「武蔵野」の冒頭で、「聞く」「見る」から自然と和す幽寂の境地を描き出したが、この「忘れえぬ人々」では、優れた風景描写を背景に個性のある人を登場させ、力強く大自然の中に生きる人々、大自然と人間の融合、調和の世界を作り上げた。そこで宇宙大自然に抱かれ、生かされているという思いを知ることによって、人と人との絆、人類愛を深く認識することが可能となる。この人間的な自覚を持つことで、自己を確固としたものとする事が出来ると言う。この「忘れえぬ人」は、単に自然と人間を書いたというだけでなく、自然と人間の一体化、融合、調和の境地という日本及び東洋の思想を見事に小説化した稀有な作品であると言ってよい。独歩の小説で大自然と人間といえば、もう一つ「空知川の岸边」が挙げられ、これは北海道に移り住むため、土地の選定に行った時の話である。この小説には、広大な自然と人々が描かれていると同時に、一步踏み込んで人々の心理と荒々しい生活の様子も書かれている。独歩のペンは、自然の描写を礎として、人間、生活、心理へと深まっていく。本論考は、自然描写に限っており、人間、生活、心理の描写については稿を新たにしなければならないので、詳しい検証は行わないことにする。

初期の独歩は、ワーズワースに心酔しており、前掲論文で、ワーズワースは自然の美を歌った自然詩人であり、哲学者でも宗教者でもないと書いていた。そのことを考慮すれば、初めは独歩も、自然の美そのものを追求するつもりであったかも知れないが、しかし、やがて日

本的東洋的な思想をほとんど無意識に受け入れることとなった。実は、その日本への文学的回帰によって、ワーズワースの詩から脱却し、自己の個性が確立され、小説を思想的に、芸術的に高い時限に押し上げられたのである。

独歩は亡くなる二年ほど前に、自らの文章の理論を纏めた「自然を写す文章」という論文を発表している。そこで「自然を見て自然を写すには、見たまゝ、見て感じたまゝを書かんければならぬ」と言い、少しでも「多く」「大きく」書けば、それは「嘘を書いたのであつて、真の敘景文でもなければ、詩としても価値はない」と書いている。さらに「自然を見て、感じたところをなるべく忠実」に表わし、人に「自分の感じたところを、感じさしきへすれば、それで成功」と述べている。ここまででは、平凡な写実論でしかないが、続いて、自ら「武蔵野」「空知川の岸边」を直接的に解説したところは、独歩個人の文章論として注視される。そこで、「武蔵野」は「感じた事をそのまま直敘したといふ事は事実」であるが、しかし、常に「頭の中に自然が充ち満ちて、自分で消しかゝつても消されぬ程に、明かに写つた自然をそのまま、敘した」のである。また、一面から言えば「自分の心をうちつけに自然に托して書いたものとも言える、自然をかりて、自然より享けた感じを書いた敘情詩である」と述べている。そして「空知

川の岸边」については、私は「自然を精細に描写しては無い、たゞ自然の感じた、真に心のそこへ自然が沁み渡つた中心点より外書いていない」(心の中心にあふれきるほど感じたところしか筆にあらわさぬ)と解説している。独歩は、見たままを忠実に書くのであり、過度な文飾や嘘、いわゆる誇張は嫌だと語っていた。しかし、だからと言って、ただ事実をそのまま写すのではなく、一步踏み込んで、事実から感じたものの、頭の中に自然が満ちて消えないほど明らかに写つた自然を書く。さらには、自分の心を自然に托すようにして書く、自然から受けた感じを書く抒情詩のような文章と述べている。自らの小説も、自然を精細に描写したのでなく、真に心に沁み、あふれ出るほど感じて書いたと断言する。自然をより感動的に捉え、深く理解し、心から迷入のように現わす。いわば自然を体現するというような文章論である。ここまでくれば、この理論はもう、事実を写す客観描写ではなく、客観を根底に置いた主観によるもので、主観的な描写論となるであろう。さらに自然は、決して「精細に写せるものではない」、主要な「一部分を取つて、それを描写すれば足りる」、後は「読む人の聯想にまかせろ」と言う。また、自然を写すのに「美しいとかいふて断することはいらぬ」、それは「こういう景色であるときへ言へば宜しい」、つまり「ニンが四まで言はなくとも、『ニン』だけで、あとの四は読者の判断にまかせなければいかん」と忠告している。この一断面を描いて見せることによって、全体を読者に連想させるといふのは、一般の文章論から成つたものではなく、本質的には詩の技法であ

り、短編小説の理論と考えられる。この論文の最後は、自然を書くには「一見一瞥ではいかぬ」、よほど「頭へ沁み込む」か、しっかりと「印象されたもの」でなければならぬ。自然を「研究」し、「勉強」し、「散策」し、至るところを「さぐつてあるかなければ」ならない。それらによって、自然は「日に日に新たなものを示して、我々を啓発して呉れます」と締め括られている。この理論は、日常的な自然観察や観察という段階ではなく、より高度な考察や洞察、及び勉強や研究という次元での自然の捉え方である。それは、感動して書くだけでなく、研究するほどに追求し、自然を実体験し、肉体化して表現するという強い文章論である。

繰り返しになるが、独歩は、見て感じたものを忠実に書くのであり、文飾、嘘、誇張は嫌だと語っていたが、この点では、坪内逍遙や二葉亭四迷の提唱する写実論や、自然主義作家の飾らず偽らず有りのままを書くという客観描写と共通する。だが、事実中心の自然主義作家と独歩の文章論と異なるところは、単に自然を精細に描くのではなく、自然から深く感動したものを書く、そこには、自ずと取捨選択という意志も働いており、むしろ、感じたことに力点が置かれているところである。また、総てを精細に書くのではなく、主要な一部分のみを書き、後は読者の連想に托すという叙情詩のような文章論である。自然主義作家の代表的存在である島崎藤村と国木田独歩とは、詩創作から文学に出發した詩人であり、同じように、自然を描き、雲の観察記録を付けるという文章修業をして小説家となった。緻密な記録文章

としては、藤村のほうが勝っているかも知れないが、その上に立った文章の抒情性及び芸術性としては、独歩のほうが優れている。それは述べてきたような、確固とした感覚的文章論とでもいべき文章理論を内部に有していたからであろう。そしてもう一つ、確かに独歩は、文飾、嘘、誇張は嫌っているが、しかし一方で、文章の技巧というものは充分に凝らしていた。「自然を写す文章」では、芸術創作上の精神面が論じられているのみで、文章の技巧については全くと言ってよいほど論じられていない。その理由は、自らの文章の良さが理解できていないか、もしくは理論化できなかったか、それとも、敢えて解説することを避けたのか、など定かではない。何れにしても実際の作品は、この論文をはるかに越えたレトリックを持つ、芸術性の高い文章である。

既述のように「武蔵野」は、自然を描くとき筆者の位置を、前半は静的な状態、後半は動的な状態とに分けており、それが、自然散策にふさわしい躍動感を持たせている。また、擬人法を多用することによって、自然の生命を強調し、生々と感じさせ、自然と人間の融合、一致の境地を内々に演出している。そして、この文章の最も大きな特徴は、自然を事実のみ理論のみで捉えるのではなく、音、色彩など聴覚と視覚を軸とした五感によって捉え、五感に訴えて、心象を高めるといった詩的な文章法である。さらに自然の風景を、絵画の遠近法を活用して文章表現しており、全体から部分へ、部分から全体へというように描写している。自然描写が、感覚的、絵画的であると言うだけでなく、

文章の構成自体が絵画の構図の取り方で、密かな効果を挙げている。これらの技法によって「武蔵野」は、描かれた自然の情景がまざまざと目に浮かび想像できる文章となっており、実務文章とは明らかに異なる随筆文という文章芸術の域に達することができた。さらに、ここに小さな付言をするならば、絵の写生と文章の描写は類似しているとは言うものの、当然のことながら芸術化する方法は異なっており、絵は点と線を道具として為され、文章は言葉を持って為される。それ故に絵は、外面的な形が中心で、色彩に強く音は弱い。文章は、外面も捉えられるが内面性、つまり精神や思想が中心で、想像に於いては秀でているが、色彩や音は然程ではない。因に、音を道具とした芸術とは音楽のことだが、或は、独歩の文章は、これらの芸術の持つ特性を相互に関連させ統合した文章と言えるのかもしれない。

二葉亭四迷は、ツルゲーネフの小説を新しい感覚的な文章で訳し、独歩は非常に感銘を受け影響されたのだが、しかし二葉亭自身の文章は、翻訳ほど感覚的な文章ではない。『浮雲』の評価は、表現的には口語文体を定着させたこと、坪内逍遙が『小説神髓』で説いた心理葛藤の世界を描いたことにある。また、藤村も独歩と似た方法で自己の文章を完成させたが、しかし、独歩ほどの感覚的な描写は構築できなかった。この二人の大家に比べて独歩は、ごく短期間に感覚的描写を成功させたが、その相違は何処にあるのか。やはり独歩には、若い時代に絵の写生に打ち込んだという絵画創作の実体験があったからと考えるしかない。絵を愛する心、絵のスケッチが、直ちに文章のスケッ

ちに転じるのであり、その姿勢の内側には「自然の声に耳を傾けよ」という自然と人間の一致、融合、調和の精神、日本的東洋的思想が存在していたのである。

注

- (1) 「独歩氏の作に低徊趣味あり」(明治四十一年七月五日『新潮』)
- (2) 「文芸的な、あまりに文芸的な」(昭和二年四月～八月『改造』)
- (3) 『抒情詩』(明治三十年四月二十九日民友社刊)
- (4) 『欺かざるの記』(明治二十六年二月四日～明治三十年五月十八日日記)
- (5) 「ウオーズワースの自然に対する詩想」(明治三十一年四月十日『国民之友』)
- (6) 『少年の悲哀』(明治三十五年八月十日『小天地』)
- (7) 『あひゞき』(明治二十一年七月、八月『国民之友』)
- (8) 『愛弟通信』(明治四十一年十一月二十三日佐久良書房刊)
- (9) 『星』(明治二十九年十二月二十六日『国民之友』)
- (10) 「天気の話」(明治三十年九月十五日～十月十五日『家庭雑誌』)
- (11) 「詩想」(明治三十一年四月十五日『家庭雑誌』)
- (12) 「千曲川のスケッチ」(明治四十四年六月～大正元年八月『中学世界』)
- (13) 「画の悲み」(明治三十五年八月一日『青年界』)
- (14) 「画」(学習研究社版全集第九卷所収)

- (15) 「武蔵野」(明治三十一年一月十日、二月十日『国民之友』)
- (16) 「忘れえぬ人々」(明治三十一年四月十日『国民之友』)
- (17) 「空知川の岸辺」(明治三十五年十一月一日、十二月一日『青年界』)
- (18) 「自然を写す文章」(明治三十九年十一月一日『新声』)

(東海学園大学人文学部人文学科)

Doppo Kunikida's Writing Technique

Shukundo ITO

Key words : writing, nature, technique, painting, art

Abstract

Even now the literary works of Doppo Kunikida have a great deal of literary merit. This report shows that Kunikida had an original writing style. It developed as a result of a boyhood spent in a beautiful natural environment. He was also influenced by the poetry of Wordsworth and the novels of Turgenev. Moreover he was interested in astronomy and cloud observation, which further influenced him. He also liked painting as a child and excelled at it. His description of nature from these kinds of experience and writing training are obvious in his works, including in his essays and novels. This report investigated the origin of Kunikida's writing style.